

「大人」と「こども」を区別するのは、案外難しいものです。もちろん、法律的に年齢で区分けすることはできますが、人間の中身を問われると話は別です。辞書によれば「大人」とは、「十分に成長した人。一人前になった人。分別のあるさま。」とあります。これを聞いて、「はい、私は大人です」と言い切れる“大人”がどれほどいるのでしょうか。また、ある一説では、「大人」という言葉は「音無し」が語源で、「何があっても大きな声を出さずに冷静で落ち着いていられる人」を指すとも言われています。だとすると、周りを見渡せば“大人”と呼べそうな人は比較的多いようにも思います。しかし、この捉え方も単純ではありません。東日本大震災の際、欧米では、日本人は忍耐強い、我慢強いとの報道がしきりになされ、見習うべき日本の美德として語られていたようです。けれども、かつて日本でキリスト者として生活していたあるオーストラリア人の方は、そのような報道に接したとき、とても心配されたそうです。我慢すること、忍耐することが、かえって、日本人たちを慰めのない生き方、窮屈な生き方へと追い詰めている側面があることを感じていたからです。だとするならば、それは、果たして一人前の“大人”の姿だと言えるのでしょうか。それでもなお、人間の知恵と力が支配し、“大人”ぶることを余儀なくされてしまう私たちです。

本日の箇所、イエスは、大人である弟子たちのことを「幼子のような者」（21 節）と呼んでいます。なぜなら、何歳になっても親にとっては子である事実が変わらないように、イエスは私たちを、いつまでも「父」なる神の「こども」であると捉えていたからです。もし「知恵ある者、賢い者」（21 節）が“大人”であるならば、神の前にそうでいられる人は一人もいません。

リーダーの状態が職場の雰囲気や左右するように、親の状態が子の心理を左右したりするものです。もちろん、人間である限り、完璧な導き手になれるはずはありません。しかし、人生のリーダーとなれば、不安定では困ります。人に、それを担いきることはできません。聖書は「神の御心」（21 節）を知るが故に、私たちが狼狽しているときも、堂々と、ぶれることなく、確信とあたたかい眼差しを持って、神のこどもである私たちを導く人生のリーダー、イエス・キリストを示し続けています。その方を通して、私たち「こども」には、人生の導きに信頼を寄せることができる「父」が示されています。「あなたがたの見ているものを見る目は幸いだ」（23 節）。

（文責：望月達朗牧師）

